

隣寺と合併「お別れ法要」営む

住職不在の状態が30年以上続いていた広島県北広島町の圓泉寺は、門徒の総意で「次代につなぐ持続可能な方法」として、隣寺である同町・圓立寺（能美直哉住職）への「合併」の道を選んだ。4月14日には本堂で「お別れ法要」を営み、門徒や地域の人のお念仏の音が響いた。

広島県北広島町 圓泉寺

2005年に4町が合併してできた北広島町は、島根との県境に近い中山間部に位置し、広島市内からは車で約1時間。人口はこの20年で1割減少して約1万8000人になるなど、緩やかに人口が過疎化している。

寺伝によると、圓泉寺の創建は1570年、初代は圓立寺出身という。同町大

塚の現在地に移転したのは400年ほど前になる。戦後は本堂に保育所を置いた時期もあったが、人口の減少とともに、40〜50軒あった門徒はこの数十年で半減。明治期に建て替えられた本堂や庫裏は老朽化が進み、その修繕などで門徒の負担は増していた。

1992年に住職が亡くなってからは、門徒約20軒



圓泉寺本堂での最後の法話をかみしめる門徒たち

で住職不在の寺院を支えてきた。「住職がなくなり、建物も老朽化していく。寺をどうしていくのか」という声はずっとあった」と語るのは、約30年にわたり門徒総代を務めてきた長田克司さん(67)。

住職後継者を迎えるため、坊守の月谷サツヨさん(2000年に95歳で死去)らとともに本山や教区、縁故の寺などに掛け合ってきた長田さん。「入寺してくださるのが一番だったが、お寺の収入だけで寺族が生計を立てるのは難しい状況。本堂を売却し、規模を縮小して存続させてはどうかなど、あらゆる想定を立ててみながら可能性を話し合ってきた」という。

その間、2月ほど離れた圓立寺の能美住職(70)が住職代務を務めてきた。長田さんは「代務を務めてくださった能美住職とは、もともと縁続き。圓立寺さんとの『合併』も随分昔から検討していたが、踏み切れなかった」と話す。

2年前、内陣の床が落ち、須弥壇が大きく傾き破損したことで合併の決心がついたという。「仏具業者に修復不可能と言われて、大きなショックを受けた。この先、細々と修繕を繰り返していても、門徒で支えられない日が来るのは目に見えている。もう限界だと思った」と長田さん。

門徒集会を昨年3月に開き、全員一致で「発展的解消」の道を歩もうと決意。「たぶん形を変えてでも、先人が何百年もかけて『圓泉寺』として歩んできた歴史とみ教を『持続可能な

先人たちの思い「持続」するために

方法」で次世代につなきたい」と能美住職や圓立寺に合併を願い出た。

「お別れ法要」には、圓泉寺の門徒をはじめ、最後を惜しむ地域の人など約70人が参拝し、満堂となった。正信偈をおつとめし、法話を題材にした講話が続けられた。長年親しんできた本堂での最後の法座を惜しむように、参拝者は話に聞き入った。

圓泉寺の責任役員で、亡き住職夫妻とは家族ぐるみの仲だったという石橋富江さん(82)は「島根から嫁ぎ、知り合いもいない中で、お寺が依りどころだった。なくなるのは寂しいが、このまま立ち腐れてしまう前に進む道が決まってホッとした。『あとを頼むねん』と言が残して亡くなった坊守さんに、『ちゃんとしてきたよ』と報告できる」と涙ながらに語った。



「お別れ法要」には門徒や圓泉寺に関係のあった人など70人が集った

登記の変更や門徒全員の同意を示す書類の作成など事務の大半を請け負い、この日も法要の進行を執り仕舞った長田さんは「お寺を残すことができず、先人に申し訳ない思いもあるが、やるだけのことはした。このタイミングしかなかったと感じる。『持続する』という点では最善だったと思う。今は振り返り、前を向いている」と話していた。

能美住職は「何とかしてお寺を再興させようと、皆さんが力を尽くしてください。法的には圓泉寺としての終止符を打たなければならなかった。悲喜こもももの思いはあるが、これからは同じ寺の門徒として、共にお念仏相続をしていきたいと思います」と話す。圓泉寺の本堂は近く取り壊されるが、圓立寺の境内として引き継がれ、鐘楼と墓もそのまま残される。